

## アメリカ音声理論の歴史(Ⅰ)

林, 哲郎  
九州大学教養部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6795481>

---

出版情報 : 言語科学. 10, pp.67-73, 1974-03-29. 九州大学教養部言語研究会  
バージョン :  
権利関係 :



# アメリカ音声理論の歴史 (I)

林 哲 郎

## 1. 序 説

アメリカにおける音声の理論的研究は、その実際的研究とともに、言語学のなかの基本的にして重要な一部門として発達してきた。この音声理論の歴史的な発達の過程を、十九世紀後半におけるアメリカ言語学の発生の時期から、たどってみることにする。この考察においては、アメリカの言語学関係の文献を直接的資料として、つとめて実証的に論を進めたいと思う。

言うまでもなく、アメリカの言語学者は、文化人類学者や民族学者をふくめて、言語の有している文化的価値や、言語の果たす社会的・民族的機能などに関して深い興味を示してきた。そして多くの場合に、彼らの研究の出発点に、そしてまたその根柢に、言語の音声的構造と音声の果たす役割割りに対する十分な理解があった。人種は異なっているけれども、それぞれの言語に伝達の社会的手段として用いられる音声は、一体いかなる性質と組織を有するものであろうか、その音声の構造的特徴はどのような方法で記述されるか、そして言語の機能のなかで音声はいかなる位置を占めるものであるか——このような種々の点に関する彼らの見解を、以下において系統的に検討していきたい。

最初に、この考察の表題の意味と、これに関連する術語について説明を加えておこう。音声理論の歴史、簡単に言えば、音声論史 (history of phonetic theories) と音声史 (history of sounds) とは明確に区別しておかねばならない。音声論史は、言語学者や音声学者がある特定の言語の音声をどのような原理に基づいて、どのような組織にととのえ、またその特徴によってどのように分類し、その機能をいかに解釈したかに関する見解の歴史である。これに対して、音声史は、ある言語の音声 (phone, speech-sounds) そのものの性質の変化、音声の体系の歴史的推移を言う。

したがって、音声論史は研究者自身の言語観・音声観に關与するものであって、考察する側の主体的な態度に係りあいがあることになる。これに反して、音声史は、むしろ音声が生起する現象そのものの推移、音声的事実の変化の過程そのものである。つまり、後者は、研究される対象としての音声そのものの変化の実態を指す。勿論、スイスの言語学者ド・ソシュールが述べているように、「観点が対象を作り出す」という考え方がある。しかし、音声理論の歴史、すなわち音声論史と音声史とを、以上のように、音声に対する観点の歴史と、研究する対象としての音声の歴史とに一応区別しておくことが便利であろう。

つぎに注意すべきは、表題に用いた音声理論 (phonetic theory) と音韻理論 (phonological theory) との区別である。この区別は、音声学 (phonetics) と音韻学もしくは音韻論 (phonology) との区別の問題と関係がある。そして、後者の音韻論が種々の意味に用いられて、かなり混同が見られるのが実状である。それは、(i) 歴史的音声論、(ii) 音声学、(iii) 音素論などを個別的に指したり、そのなかのいくつかを包含した意味に用いられることもある。それゆえ、

本稿では、音韻論を音声学と音素論 (phonemics) とを総称するものとして用い、特別の場合にのみ、歴史的音声論の意味を含めさせることにする。

以下の考察においては、音声 (phone, speech-sound) を取扱う音声理論 (phonetic theory) と音素 (phoneme) を研究対象とする音素理論 (phonemic theory) とは厳密に区別していくことにする。歴史的には、音素に対する科学的認識は、二十世紀の初葉、ことに20年代に発達するにいたっている。勿論、その初期的な音素概念はさらに早い時期に見られるにしても、そのような段階での呼称としては、音声・音声論・音声理論などの術語を用いることにする。猶、音声と音素の区別については、ここでは触れないでおく。

一般的に言って、音韻論は、ド・ソシュールの区別の見解にしたがって、通時的音韻論 (diachronic phonology) と共時的音韻論 (synchronic phonology) とに分けることが適当であろう。初期のアメリカ音韻論においては、当時のヨーロッパの歴史言語学・比較言語学の影響を受けて、音韻変化論がもっとも深い関心事であった。しかしながら、このような音韻の歴史的研究とともに、共時的音韻論としての記述的原理に基づく音声構造論がすでに発生していたと見てよい。この点の考察は、アメリカ音声理論の歴史的考察のなかで特に重要な意義を持つことになるであろう。われわれは、音声に対す音声学的観点 (phonetic view) と音素論の観点 (phonemic view) とを区別したと同様に、音声に対する通時的 (diachronic) 取扱いと共時的 (synchronic) 取扱いとを混同してはいけないであろう。

表題は「アメリカ音声理論の歴史」としているけれども、音声理論の展開の考察を中心としながら、かなり自由に、言語学の他の部門である形態論・統語論の理論にも言及せねばならないであろう。そしてまた、とくに言語の本質に関する見解との関係において、音声理論を考察しなければならないであろう。たとえ、音声・音素・形態素・文法素などの言語的レベルの峻別には従わねばならないにしても、それぞれのレベルに対する見解や観点を論ずる場合には、他のレベルを包含した言語現象全般についての考え方も考慮しなければならない。したがって、適切な言い方をするならば、本稿は、アメリカ音声理論を中心とした言語理論の歴史ということになるであろう。

## 2. 初期の概観

アメリカにおける言語音の真に科学的な研究は、イエール大学のサンスクリット語・比較言語学の教授であったホイットニー (William Dwight Whitney, 1827-94) によって始められたと見てよい。彼の音声理論は、一般言語学に関する2つの有名な著作である『言語と言語の研究』(1867)<sup>1)</sup>と『言語の生命と成長』(1875)<sup>2)</sup>において、その見解の輪郭をうかがうことができる。

言語学に関するホイットニーのこの2書は、ヨーロッパ言語学史の上でも重要な意義をもつものである。それらは、単にアメリカ音声理論のもっとも初期の提示であっただけでなく、アメリカの歴史言語学と、ホイットニーの言う言語科学 (linguistic science), つまり、その後の発展において記述言語学と称されるにいたる学問の概要の提示でもあった。

十九世紀後半のヨーロッパにおける歴史言語学と印欧語比較言語学の領域に関して、もっとも輝かしい学問的貢献を行なったのは、ほとんどがドイツの学者であった。この分野において、アングロ・アメリカ人のなかで、世界に誇ることのできる学者として、つぎの三人を指摘

するのが普通である。すなわち、前述のホイットニーと、ホイットニーと同じくサンスクリット語学者であったブルームフィールド (Maurice Bloomfield, 1855-1928) の二人のアメリカ人と、英国のスウィート (Henry Sweet, 1845-1912) であった。周知のように、M. ブルームフィールドは、アメリカ構造主義言語学の聖書と称されている『言語』(1933) の著者レナード・ブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949) の叔父に当たる。彼はジョンズ・ホプキンス大学のサンスクリット語・比較言語学の教授であり、インド古代の聖典であるベダ (Veda) とその宗教に関する研究は不滅のものである。L. ブルームフィールドのサンスクリット語研究への関心とともに、初期アメリカ言語学史の建設者たちが、いずれも古代印度の古典的な文語と印度の文法学者パニニ (Panini) の著わしたサンスクリットの文典に通じていたことは注目すべきである。

ホイットニーが前記の二大言語学書を出版した時期に、英国のスウィートは、はじめて科学的英語学の発達を予見する「語・論理・文法」(1876) と『音声学必携』(1877) とを世に問うている。しかし、ホイットニーには、この年代よりさらに古い時期に書いた音声理論に関する論文がある。それは、レプシウスの標準アルファベット論に関する批評 (1861) と、母音と子音の関係に関する論文 (1865) である。もし、英国における同時代の音声学者を求めるならば、われわれは、スウィートの学問的先駆者であるエリス (Alexander John Ellis, 1814-90) を見出すことができる。エリスの『初期英語の発音に関して』の第 I 巻<sup>3)</sup> は 1869 年に出版され、1889 年までに第 II～V 巻が続刊されて完結している。この書において、英語の音声の歴史的研究ははじめて科学的基盤を与えられ、スウィートの『英語音声史』(1888)<sup>4)</sup> の大著と並んで、十九世紀末における英語学の二大古典となった。

以下に考察しようとするホイットニーの音声論の評価は、このような言語学・音声理論の一般的な発達を背景として行なわれねばならないであろう。とくに、同時代の英国における音声学の発達と比較することによって、その正当な評価が得られるであろう。二十世紀初葉から発達した真に科学的な音素論の原理と方法論の立場から、ホイットニーその他の学者の未発達の音声理論の不完全・不備・不十分さを非難すべきでないことは言うまでもない。

アメリカにおける文化人類学の分野で偉大な業績を挙げ、さらに言語学の世界にも大きな影響を与えた学者は、ボーアズ (Franz Boas, 1858-1942) であった。彼は、約40年の長期間にわたってコロンビア大学の人類学の教授の職にあり、アメリカ・インディアンに関する民族学・人類学的研究とアメリカ・インディアン語の構造的・分類学的研究に不朽の功績を残している。その弟子の一人に、アメリカ構造主義言語学の基礎を築く一人となったサピア (Edward Sapir, 1884-1939) があつた。サピアの『言語』(1921) と「言語における音声構造型」(1925) とは、言語の類型的構造についての理論と、音声に関する音素論的解釈が伺われるもので、アメリカ構造主義言語学の古典と称されるものである。しかし、この二つの著作におけるサピアの理論と見解が、ボーアズ指導の下に行なつたアメリカ・インディアン語の研究の成果に負うところが大きいことは、忘れてはならない。

文化人類学の指導者ボーアズが編集主幹となり、自らも論文を寄稿して刊行した『アメリカ・インディアン語必携』(1911)<sup>5)</sup> の大著は、事実上、アメリカ言語学の根本原理としての記述主義を確立したものであると言ってよい。この書は、前述のサピアの『言語』(1921) より10年、ブルームフィールドの『言語』(1933) より20余年も先立つ初期の著作である。そして、アメリ

カ・インディアン語に関する文化人類学者の専門書である。しかしながら、音声体系の記述と形態論の取り扱い方において、一般言語学十分に通用する原理と方法論を提示している点において、アメリカ構造主義言語学の真の学問的出発点をこの『アメリカ・インディアン語必携』(1911)に置くことは、きわめて妥当であると思われる。

### 3. アメリカ言語学者の系譜

初期のアメリカ言語学の基礎を築き、その発達に尽した学者として、前述の概観によって、少なくとも四人の言語学者・文化人類学者が浮び上がってくる。すなわち、ホイットニー、ボーアズ、サピア、ブルームフィールドである。彼らが、まだ歴史の新しい言語研究を純然たる一つの科学の地位にまで高めるにいたった功績は、それぞれに偉大であった。これらの学者は、言わば、アメリカ言語学史という山脈のなかに、ひと際輝かしく秀でた四つの巨峰であるということに異論を唱えるものはないであろう。

この四人の言語学の先駆者について、『アメリカナ百科辞典』<sup>6)</sup>は、それぞれの簡潔な伝記的説明と学問的業績を記している。そして、その生年・没年のあとに、つぎのような学者としての名称を与えている。すなわち、ホイットニー(アメリカの文献学者)、ボーアズ(ドイツ生まれのアメリカ人の人類学者・民族学者)、サピア(アメリカの言語学者・人類学者)、ブルームフィールド(アメリカの言語学者)となっている。

確かに、彼らの学者としての呼称は、それぞれの学問的業績の内容に対して、ふさわしいものであると言えよう。ただし、このなかでボーアズだけは、言語学者と称されていない。それは、勿論、言語学は文化人類学という学問のなかの一部をなしているという、学問分野に関するアメリカ的な考え方に基づいている。つまり、文化人類学者としてのボーアズの偉大な功績のなかに、言語学者としての貢献は十分にふくまれていると見られるからである。

興味あることには、この『アメリカナ百科辞典』は、ホイットニーをアメリカの文献学者(American philologist)と呼び、ブルームフィールドをアメリカの言語学者(American linguist)と称している。この呼称の区別は、なんでもないように思われるが、かなり重要な歴史的意義があると見てよい。このことは、結局は、文献学(philology)と言語学(linguistic science, science of language, linguistics)との区別の問題にもつながっている。

最初に考えられることは、この百科辞典の編集者は、二人の学者名を、それぞれが担当していた大学の講座名に忠実に従っていたということである。伝記を調べてみると、ホイットニーは1854年に、イエール大学の「サンスクリット語教授」に任命され、1870年からその没年の1894年にいたるまで「サンスクリット語・比較言語学の教授」(Professor of Sanskrit and comparative *philology*)であった。これに対して、ブルームフィールドは、サピアの没した翌1940年に、サピアの後任者として、同じくイエール大学の「スターリング言語学教授」(Sterling Professor of *linguistics*)として着任している。両者が担当した学問を、一方ではphilologyと言い、他方ではlinguisticsと称しているのである。このことから、当然のこととして、文献学者(philologist)と言語学者(linguist)の区別が生じている。

概略的に言えば、ホイットニーが活躍した十九世紀後半には、歴史言語学・印欧語比較言語学が言語研究の主流をなしていた。そして、これらの学問は、現在で言う言語学(linguistics)をふくめて、‘philology’と総称されていたのである。当時の言語研究は、すべて「文献学的」

(philological) であったと簡単に一般化してしまうことは危険である。そしてまた、ブルームフィールドの時期における言語研究が、文献学的な性質から科学としての言語学の特徴を備えたものに達していた、と言い切ってしまうことも正しくはないであろう。この問題については、ブルームフィールドがホイットニーの業績を批評している点に関する考察のなかで、触れることにする。ただ簡略に言うならば、当時においては、文献学は、言語による記録に現われる過去の精神文化の価値の研究を主としていた。これに対して、言語学は、言語の性質・機能に関する一般的原理を追求する学問であった、としてよい。<sup>7)</sup>

われわれは、ホイットニーとブルームフィールドに関して述べたと同じように、ポーアズとサピアについても、ふたたび言及しておく必要がある。ポーアズはバフィン島の探険に参加したり、ベルリン王室民族博物館に勤めたり、ベルリン大学の地理学の教師をした後で渡米した。そして、クラーク大学の民族学講師を勤めた後に、前述のように、1899年～1937年の間、コロンビア大学の人類学教授として、アメリカの文化人類学の分野の指導的人物となった。

コロンビア大学でポーアズの弟子であったサピアは、このポーアズからきわめて大きい感化を受けたことは周知のとおりである。この間の事情について、サピアの高弟の一人スワデッシュ (Morris Swadesh, 1909-1967) は追悼録「エドワード・サピア」のなかで、<sup>8)</sup> つぎのように述べている。

「彼(サピア)は言語学に興味を抱くようになり、ゲルマン語で修士の学位を取った。この頃に、彼は、アメリカ人類学者の指導者で、実際上アメリカ言語学における厳格な科学的方法の創始者であるフランツ・ポーアズと接触するようになった。ポーアズはサピアに深い影響を及ぼし、特に、種々の構造をもつ諸言語に関する広汎な知識の必要性を彼に印象づけた。サピアはわれわれに、ポーアズは言語に関して学ぶべきすべてのものを有しているとの印象を受けて、ポーアズとの会談からどのようにして帰ってきたかを語ってくれたことがある。彼が以前に確実で例外なしと信じていたあらゆる一般化に対して、ポーアズは、疑いの余地のない反証例をアメリカ・インディアン語から引き出すことができた。」

サピアの言語研究における文化人類学的特徴は、ポーアズの指導と、その絶大な感化とによっていることは、このスワデッシュの記録によっても明らかである。

#### 4. アメリカ言語学の様式

アメリカにおける言語研究が、ある種のアメリカ的特色を示す言語思想の展開として発達してきたことは、われわれの考察の最初の段階において、想定することができる。それは、一般的には、アメリカ言語学 (American linguistics) という名称によって、今世紀における欧州の種々の流派の言語学から区別されていることでも明らかである。

しかし、このアメリカ言語学という呼称は、きわめて包括的な名称であるために、研究者によって異なった意味に用いられているようである。これをアメリカにおける言語研究の全体を総称するための術語、つまり 'linguistics in America' として用いる者もある。あるいは、アメリカ的な特色を有するアメリカにおける言語科学の一部、つまり 'American style of linguistics' を特に指すと考える者もある。われわれは、ジョーズ (Martin Joos, 1907-) の見解に従って、後者の意味を採用することにしよう。

周知のように、ジョーズは『言語学読本——1925年以來のアメリカにおける記述言語学の発

達』(1957) という論文集を編集した。<sup>9)</sup>これに付したその序文の冒頭で、彼はつぎのように述べている。

「アメリカ言語学という術語は、今日では2つの主要な意味において流通している。第一に、[アメリカの]土着民の諸言語の記録と分析である。第二に、言語思想におけるアメリカの様式である。」<sup>9)</sup>

アメリカ言語学の特徴を、アメリカ・インディアンの諸言語を主として研究対象とすることと、従来未記録の状態にあったこれらの言語を記録し分析する点にあるとするのは理解できる。しかし、第二の点に関するジョーズの説明は、あまり明確でない。

要するに、アメリカ言語学は、アメリカ・インディアンの言語を対象とした記述言語学・記述主義的言語学 (descriptive linguistics) である、という点が強調されている。そして、ジョーズは、『言語学読本』の副題にあるように、サピアがアメリカ言語学会の機関誌『言語』の第一巻に掲載した「言語における音声構造型」(1925) を年代的に、アメリカ記述言語学の出発を記念する最初の論文として掲げている。ジョーズが第二の意味として「言語思想におけるアメリカの様式」と言う場合の「アメリカの様式」(the American style) とは一体何であろうか。彼自ら、このアメリカの様式に対する特別な適切な名称を見つけることは、見込みのない事柄であると言って、正確な定義づけを避けているのである。

もし、ジョーズの言うアメリカの様式ないしは「アメリカ言語学の様式」(the style of American linguistics) の内容は、それに続く説明から推測するならば、アメリカ・インディアン語の分析・記述における原理ないしは方法論全体に対する言語学者の態度に関係があると見てよいであろう。そして、アメリカ言語学がその決定的な方向を採るにいたったのは、つぎのことが決定された時期からであると言っている。

「[アメリカの]土着民の言語は、モデルとしてのラテン語に従来のように依存するよりも、むしろ、言語はどのようなものでなければならないかと言うことに関する先在的な図式を描かない方が、より優れた記録ができる。」<sup>10)</sup>

そして、これに関連してボーアズの名前を挙げるのが普通であるとしている。これは、結局は、純粋に客観的な言語記述の態度を強調したものである。

さらに、ジョーズは「ボーアズの世代」の学者の言語記述の態度を、上述とは別の表現によって、つぎのように示している。

「それぞれの言語は、その内部から説明されるべきであり、その説明は、その言語の論理の下で公式化されるものである。」<sup>11)</sup>

ジョーズは、このような原理を、ボーアズ一派の学者たちの指導原理であったとしている。

勿論、アメリカ言語学にとって独特の様式を、以上のような特色をもつものであると説明した学者は、ジョーズ以前にすでに存した。その代表的な学者は、『アメリカ言語学史1925~1950』(1951~1952)<sup>12)</sup>の著者 R. A. ホール (Robert A. Hall, 1911-) である。彼の、ボーアズ編集の『アメリカ・インディアン語必携』(1911) に関する解説は、アメリカ言語学の「様式」をもっとも明白に説明している。

「この著作は、handbook といっても、単なる教本という意味ではなく12から15のインディアン諸語を、Boas や、ほかの人たちが、記述的に写しとったものを、集録したのである。この Handbook, 第1巻についている序論は、いまでは、アメリカ言語学の古典的教典であ

る。すなわちこのなかには、アメリカ・インディアン諸語の構造上の、いろいろな特徴が例示されており、また、言語学の基本原理、すなわち、各言語は、音、形態、意味について、固有の構造をもち、その言語の構造によってのみ、記述さるべきで、ほかの言語構造（たとえば、伝統的な、ギリシア・ラテン文典）によって記述すべきではないという原理が確立されている。」<sup>13)</sup>

以上の考察に基づいて考えれば、ホールもジョーズも、ボアズの『アメリカ・インディアン語必携』をアメリカ言語学の真の出発点と見なしていることは明らかである。

要約すると、アメリカ言語学の特徴となる様式は、つぎの2点となる。

(i) 言語構造を厳正に客観的に、そして帰納的原理によって記述する。

(ii) 言語は、その言語独特の構造の特質に基づいて記述する。

前者は、言語研究における記述主義的方法の確立を意味する。後者は、言語に対する先入観、たとえば、文明国の言語と未開人種の言語に関する差別的見解の除去を意味する。しかし、ジョーズのように、(ii)の特色は「一般的原理を拒否する」(rejecting general doctrine)とするボアズの世代の考え方であったと解釈するのは、いささか問題があるであろう。

## 注 釈

- 1) Whitney, W. D., *Language and the Study of Language* (New York: Charles Scribner's Sons, 1867, 1885<sup>6)</sup>)
- 2) Whitney, W. D., *The Life and Growth of Language* (London: Kegan Paul, 1875, 1885<sup>5)</sup>)
- 3) Ellis, A.J., *On Early English Pronunciation, Part I* (London: Trübner, EETS, 1869)
- 4) Sweet, H., *A History of English Sounds* (Oxford: Clarendon Press, 1888)
- 5) Boas, F. (ed.), *Handbook of American Indian Languages* (Washington: Bureau of American Ethnology, 1911)
- 6) *Encyclopedia Americana* (Americana Corporation, New York, 1970), s. v. 'Whitney, William Dwight,' (vol. 28), 'Boas, Franz,' (vol. 4), 'Sapir, Edward,' (vol. 24), 'Bloomfield, Leonard,' (vol. 4)
- 7) Cf. Bloomfield, *An Introduction to the Study of Language* (New York: Henry Holt, 1914), p. 308, footnote.
- 8) Swadesh, M., 'Obituary: Edward Sapir,' *Language* XV (1940), p. 132.
- 9) Joos, M., (ed), *Readings in Linguistics—The development of descriptive linguistics in America since 1925* (American Council of Learned Societies, New York, 1957)
- 10) *Ibid.*, p. v, 'Preface.'
- 11) *Ibid.*, p. v.
- 12) Hall, R. A., 'American Linguistics 1925-1950,' *Archivum Linguisticum* vol. III (1951), pp. 101-125, vol. IV (1952), pp. 1-6.
- 13) *Ibid.*, p. 113 (興津達朗訳注, 『アメリカ言語学史 1925~1950』(大修館, 1958年), pp. 17-18.

# A History of American Phonological Theory (I)

Tetsuro Hayashi

## 1. Introduction

The main theme to be discussed in this paper is the historical development of American phonological theory since the end of the 19th century. Both American linguists and anthropologists seem to have been fully concerned with phonological aspects of language in general as well as American Indian languages.

First, the history of phonological theory must be kept apart from the history of speech-sounds. The terms phonetic theory, phonemic theory and phonology should be strictly defined and employed in their peculiar contexts. The distinction between synchronic phonology and diachronic phonology is also made in this paper, and so is the distinction between phonetic view and phonemic view. The history of American phonological theory will be discussed in a wide perspective, including the problems of morphology and syntax.

## 2. Outline of Early American Linguistics

W. D. Whitney (1827-94), professor of Sanskrit and comparative philology at Yale, may be the founder of American linguistics and phonological theory, which were first set forth in his two famous works, *Language and the Study of Language* (1867) and *The Life and Growth of Language* (1875).

Towards the end of the 19th century, there were two more world-famous Anglo-American scholars, namely, Maurice Bloomfield (1855-1928), professor of Sanskrit, and Henry Sweet (1845-1912), reader of phonetics at Oxford. Sweet's *Handbook of Phonetics* (1877), whose publication was almost contemporary with the earliest treatise of phonology by Whitney, formed a scientific study of speech-sounds in the modern sense of the word. His *History of English Sounds* (1888) and its philological predecessor A. J. Ellis's *On Early English Pronunciation* (1869-1889) were both the chief achievements of phonetic science in England.

Franz Boas (1858-1942), professor of anthropology at Columbia, was a leading specialist in American ethnology and American Indian languages. His *Handbook of American Indian Languages* (1911) is, in effect, a pioneering work, from which was derived the germ of descriptive (or structural) linguistic principles characteristic of American language study. These principles were later developed by Edward Sapir (1884-1939) in his *Language* (1921) and his epoch-making essay 'Sound Patterns in Language' (1925), and also by Leonard Bloomfield (1887-1949) in his *Language* (1933).

### 3. *Genealogy of American Leading Linguists*

We may assert from the foregoing explanation that American linguistics was established by the four distinguished scholars Whitney (American philologist), Boas (German-American anthropologist), Sapir (American linguist and anthropologist), and L. Bloomfield (American linguist).

The *Encyclopedia Americana* registers Whitney as American philologist and Bloomfield as American linguist. This is because the official name of the chair of professorship at Yale was changed according to the advancement of linguistic study towards the turn of the century. It may be safe to say that one principal line of the tradition of general linguistics is that from Whitney to Bloomfield, while another is that from Boas to Sapir in the field of anthropological linguistics.

### 4. *The American Style of Linguistics*

The term American linguistics is usually distinct from European linguistics. Yet, the former is often considered as having two sorts of usage, namely, 'linguistics in America' and 'the American style of linguistics.'

Joos explains that the term American linguistics is nowadays current in two senses: 'first, the registration and analysis of the indigenous languages; and second the American style in linguistic thought.' One of its principles is that 'every language has to be explained from the inside out, the explanation being formulated under the logic of that language.'

The same view as mentioned above is also expressed by R. A. Hall, Jr. The principles of American linguistics, then, can be summed up as follows:

- (i) objective registration and rigorous analysis of language structures on an inductive principle.
- (ii) description and explanation of each language structure according to its own logic.